

杉並郷土史会 第348回例会 『庶民の生活を支えた寺子屋あれこれ』

主催 杉並歴史会

講師 足立区立郷土博物館 特別専門員 安藤 義雄先生

日時 2002年6月15日 13:30~

【司会者】

今日は本当にお天気の悪いところ、お運びいただきまして有難うございます。本日の講師は、足立から遠路来ていただきました、安藤義雄先生です。わたくし自身は安藤先生が教育畑を歩かれたということだけで、これ以上は何も存じ上げませんので、ご紹介できません。先生からのお話にも経歴もにじみ出るのは無いだろうかと思ひます、下手な紹介をするよりもお話をうかがった方が良いでしょうと思ひますので、省略させて戴きます。始めにお断りしますが、時間ありませんので、お話が終わってからお二人ぐらい、質問を受けて戴けるように先生にお話を致しました。あらかじめお話の中で、あるいは始めからこのことは是非聞きたかったということがありましたら、短く頭の中でまとめていただければありがたいと思ひます。それでは先生、よろしくお願ひ致します。

(拍手)

【講演者】安藤 義雄先生

皆さんこんにちは。本日はお招きいただきまして有難う御座います。色々な所でお話をさせていただきまして、ありがたいと思っております。私は足立区教育委員会を退職して14年になります。在職中は社会教育主事という専門職をしていました。(社会教育主事とはPTAの指導、成人学習、団体の育成などが主な仕事で、社会教育法に基づき最低一人を、都道府県市区町村に、雇うことになっています)10数年前に、明治5年学制頒布して100年になった時、教育100年史を作りました。その編纂(へんさん)で、明治以前の江戸時代、寺子屋の項を私が担当しました。

足立区は寺子屋の調査を前々から熱心にやっておりました。

現在、教育熱心なのは下町よりこの山の手の方です。ところが山の手は江戸時代、天領つまり幕府直轄領ではなくて大名領だったり旗本領だったり、いろいろな事情がありました。ですから、世田谷などは足立区と同じくらいの大きな区ですが、寺子屋は四つか五つしか無かったのです。当時山の手の方は雑木林で、木はあまりお金になりませんでしたから、お百姓さんは貧乏していたのです。

ところが足立区に寺子屋は50いくつあります。足立区は江戸時代、天領で、米が穫れる見渡す限りの水田地帯でした。戦中戦後、23区内では、トップでお米を供出していた区であります。江戸時代はお米が経済の根幹ですから、足立区は非常に豊かでありました。明治以降、千石のお米を産出する村が東京都内で19あり、足立区にそのうち9か村あります。半数も千石以上の米を産出する村

があるような所ですから、江戸時代はいかに豊かだったかがわかると思います。そういう背景もあり、お百姓が無学だというのは、これは絶対間違いです。

江戸時代は、長屋に住んでいる『熊さん』『八つつあん』は税金を納めていませんから、人権を認められていませんでした。納めているのは大家さん、家主です。店子は税金を納めていませんから、お金を借りるにも大家のはんこで借ります。なにか訴訟を起こすのでも、自分のはんこは使えないのです。町の役人の選挙でも参加はできません。家主だけです。そういうことでいえば、人権を一切認めてはいません。喧嘩して訴えるといっても、一緒にお白州（おしらす）に並んで、「何々店（たな）熊太郎こと私が代理で訴えます」と、大家さんが訴える。人権を認められてない人は、なかなか教育も受ける機会は無かったのです。

お百姓というのは納税者ですから、幕府の命令が文書で来ます。まず、年貢の割り当てが村に来ます。その村の書付（かきつけ）を読めて、そろばんで計算も出来なければなりません。

寺子屋の教科書の数学は、大変に高等です。川向うの木の高さを測る方法、1俵ずつ何俵並べて、山に積むと何俵か、一発でわかるように計算ができる、そのような問題が、100項目程で教科書になっています。それは足立区郷土博物館に展示してあります。

そして、算額と言うのが流行っていました。微分積分、円の中の面積などです。それがまた文体が難しい。今なら単位に英語を使ったりしていますけれども、昔は問題が漢文で書いてありました。その出題を書いた『算額』という、絵馬の大きい物があります。裏に正解者の名前が載ります。大きさは幅50cm、長さ1mから1m50cmの厚板で図形が書いてあって、問題が漢文で書いてある。出題者の名があり、また裏には正解者の村名と名とが書いてあるものです。この『算額』が足立区にはたくさんあります。山の手の方ではまだ聞いたことがありません。足立区ならずとも下町には（天領には）大体あります。これは関（せき）流の和算です。そろばんの加減乗除だけではありません。日本の高等数学和算は、外国の学者が盛んに研究し、素晴らしい学問だと、論文を数学の学会で多く発表しています。

明治になってから教育が普及し、どこでも学校が建って進展してまいりました。新しい学校が出来て何が変わったかといいますと、席が変わりました。今この会議室にあるこのような形、これは学校です。黒板があり先生がいて、生徒が先生の方を向いているというのが学校形式です。これはどこから来たかという、教会であります。牧師さんがいて十字架があり、牧師さんが説教をして、皆さんが聞いている。

一番前の席には名前があります。ご存知でしょうか、これは『アーメンコーナー』といいます。一番お金持ちが座るところなのです。牧師さんが説教を終えて最後に『アーメン』とやります。そうすると籠を回して、喜捨（きしゃ）を集めます。寄付を集める時に、誰だって余り出さない人の所へ最初には行きま

せん。最初は一番出す人の所へ行って沢山お金を入れて貰って、そのお金を皆に見せながら寄付を集めます。ですから、一番前には町で一番知名度の高い人が座る。一番後ろの席、これはその土地の信者の席ではありません、旅人の席です。だから椅子がありません。腰掛が無いから一番最後の方は膝まづいています。喜捨を集め出したらすぐに立って、教会から逃げられるようになっていきます。一番前で座っていて逃げる訳にはいかない。一番後ろにいれば立ってずっと逃げられる。ですから教会のドアが一番後ろにあるのです。それが学校に取り入れられてこういう形になった。イスラム教は違います。このような座り方を学校でしていません。大学の法科などに行きますと、階段教室という半円形の教室があります、講堂の多くがその形で、これはイスラム教徒の教室の真似です。大勢集めて講義をするのはイスラムです。こういう半円形の教室はイスラム教です。

寺子屋はというと、もともとが寺院です。お寺に行っているいろいろ文字の読み書きを教わる子供のことを寺子といいます。寺子を集めて職業にしているから寺子屋なのです。江戸時代は読めれば良い、意味がわかれば良い、字が違っていても通じれば良いというのがごく一般ですから、いろいろありました。ですから「寺小屋」という表記もある。

教育100年史の編纂（へんさん）が各市町村で始まる時に文部省で打ち合わせがあり、寺子屋の表現を統一しようではないかということになり、それで全部この『寺子屋』に統一されました。今の教育は字にしても、はねてはいけない、止めなくてははいけないなど、重箱の隅をほじくり返す様に学校で教えるものですから、どうでもいいとしていた文字の用法も必ず先生が悩むのです。それで統一しようということになりました。

寺子屋の教室の原形は寺ですから、仏壇があります。導師（先生）がいます。導師に指導を受けるお坊さん達はコの字型に並ぶ、これが寺子屋式の教室になりました。

足立区の寺子屋でも幕末になりますと『群雀堂』という寺子屋がありました。その群雀堂は120人も生徒が来ていたそうです。1人の師匠で120人は教えられません。生徒は大体6、7歳から12歳位まで、今の小学校1年生から6年生と同じです。同じだということは、寺子屋の流れを小学校が採ったということです。

他の国、ロシアなどへ行くとまったく違います。8年とか色々学制が違いますけれども、日本では6年です。寺子屋では6年生の前へ3年生が座り、4年生の前に2年生が座る、こういう座り方です。

師匠は一度教えるだけで、後はほとんど教えない。手書きで手本を書いて見せて、その書き方をよく見せた後は教えません。解からないことは先輩に聞けということで、先輩が教える。実は子供は教えることが一番勉強になるのです。教えるために、自分が色々調べなければいけないので、自分の勉強になるのです。

自分より年下の子に「ねーお兄ちゃん、これどうやって書くの」と聞かれた時

に、自分が出来なければ恥です。だから聞かれても書けるように、自分が一生懸命家で勉強したのです。うまい教育法です。今の小学校でもこれをやると良いと思います。

先生は遊んでいてもいいのです。先生が教育委員会から貰った教科書を配って、後はどうしても困った時だけ教える。そのような寺子屋式をやれば良いと思います。子供自身が勉強して子供自身が教えるから、教わる方も非常に気が楽です。子供にとって親しみのない大人、しかも先生という、親が頭を下げるその先生が、どんなに恐いか、今の先生は恐くないので困るのですが。

話は変わりますが、今の先生は、なぜ子供に媚を売るのでしょうか。子供に媚を売って決していいことは無いと思います。教育者は人間の尊厳を持たなければいけないと、わたくしは思っています。研修会では手厳しくいいますが、みんな子供に受けよう受けようとして、教員がテレビに出演するタレントと同じになっては駄目、厳然としていなくては駄目です。

私たちの小学校の時の校長先生は、記念式典の時はフロックコートを着て重々しく廊下を歩いておられました。校長先生が廊下を通る時には、いつも天皇陛下が通るみたいなもので『三尺下がって師の影を踏まず』となりました。今は生徒が三尺下がった時は恐いって先生が言うのです。何で恐いか。反抗すると三尺下がってまわし蹴りやるから恐いって言うのです。このまわし蹴りであごの骨折った教員がどこかの県にいたではないですか。だから教育委員会で生徒のまわし蹴りは気を付ける等と、そんな馬鹿なことを通達するようになった。何でそうなってしまったのかなと思うのです。

今、世界で一番というのはいろいろあります。この一番の中で、乳幼児の死亡率が、日本が一番少ないです。1930年と言いますと私がちょうど乳幼児の頃でありますけれども、この時は1,000人の内124人の、赤ん坊が生まれてすぐに死んでしまいました。私の兄と姉が3人乳幼児で死んでいます。育たないものですから、親が太田の呑竜さんにいって、祈祷していただき、大変な寄進をして、呑竜さんの一字を貰い『竜雄』とわざわざ書いていただいて、それで命名したのにその翌日私の兄は死んでしまいました。そういう恐ろしい時代だったと思います。

1993年は、1,000人中4.3人に減り、アメリカは8.5人、ヨーロッパ諸国も同じ様であります。1997年ですと3.7人です。益々死亡率が低くなって参ります。江戸時代は非常に高く、明治20年以前までの調べはありませんが、当時は平均寿命が男は32、女は34でした。人生50年といっておりましたけれども、実際統計ではかなり乳幼児が死んでいました。これで死亡率が高くなって平均寿命が男子が32歳、女子が34歳と低くなってしまったのです。今はみんな80を越えて、わたくしも75でこういう風に杉並まで出稼ぎに来ている。子供の頃は、こんなに生きるとは思いませんでした。不思議です。

江戸時代は時々天然痘が流行しました。天然痘は周期的に病気が蔓延します。それを乗り越えた人は免疫が出来、一生絶対天然痘にはなりません。乗り越えた年代の子は免疫が出来ますから、翌年には天然痘が無いのです。それが何年

か経つと免疫が次第に薄くなり、無くなって、又天然痘が流行る。わたくし共が子供の時分、子どもが死ぬのはたいがい疫痢や赤痢でした。なぜ死んだのか友達の医者といろいろ議論いたしました。、私の考えで医者の考えではないのですが、皆さんの家庭で子供さんがお腹をこわしたらどうしますか。まず何をやりますか。お湯を飲ませる、とにかく水分を摂らせるでしょ。ところが私が子供の頃は、お腹こわしたら一切水を飲ませないのです。だから脱水症状で死んだのです。これが一番多いのではないかなと、私は思いました。しかし医者は「科学的な根拠を持って論議しなくては駄目だ、そういうのは見聞で議論にならないのだ」と、言っていました。が、わたくしの体験から言いますと、当たっているのではないのでしょうか。

成人を願うという行事の一つ、七五三はどこでも盛んですけれども、江戸時代の七五三について、こんな事が『江府風俗志』に書いてあります。

十一月十五日には、子供、悦び髪置きとて、末広扇子を奉書に包み麻苧をさげ、（扇子を奉書に包んでちょんまげのようにしているのですね。後ろにその麻苧（まちょ）麻をさいたものです、それを提げた） しらがと名付ける物を頭にかぶらせ（なるほど、長生きする様にです） うぶすなのかみへ参詣したるや、男子はかま着とてかちんの袴（かみしも）に（かちんというのは濃い藍いろです） 子持ち筋付き（これは太い線と細い線が付いた筋の柄を子持ちって言います 紋処（もんどころ）には宝来を付けたる也（これはお稲荷さんなどにある柑子の恰好をしたもの） 女子の七歳帯解の祝儀も大方上着下着白むくかい取り（着物の裾をとり、裾をからげることです） こし帯（こしひも）凡（およそ）は絹郡内（これは甲州絹ですね高級品です） 加賀絹位のもよふ物にて（模様が付いている） 羽二重の縫入等（ししゅうのことです） ことにまれにして有し。

近年の結構に及ばず、衣服類も七つ九つも着し、すごいですね。晴れ着を七つ九つですか、お祝いにくれた着物をみんな着る。私の家は『信濃屋』という商人で、出入りの職人に、祝儀いに『信濃屋』と名前の入った半纏を暮れにあげます。年始に来る時に信濃屋の半纏を着て来ます。だけど隣へ行く時には、隣の『上総屋』さんの物を着て年始に行くわけです。うちの半纏が一番下に着て上総屋の半纏が一番上に着るわけ。職人が半纏を何枚も着て着膨れている。それと同じことを子供にしているのです。

男の子だと貰ったこいのぼりを全部飾る。もらった着物は着なくては失礼ですから、重ね着するわけです。帯で止めません。上に引っ掛けズルズルして歩けないから肩車で行く、とこういうわけです。それでお祝いを貰ったところに行って挨拶する。「あら、いいおべべ貰ってよかったわねー」という風に、そして次の家に行く時に急いで脱いで下のものを上に着替えるというようなことをした。これは大変です。今の結婚式にお色直しというのがありますが、その名残です。

七五三と言いますと3歳や5歳位からです。それ以前の子は人別帳にも載せません。出生届けを出してまた死亡届出すはめんどくさいから、丈夫に育て

段々悪ガキになって来て、これはとても死にそうもないという風になってから、名主にきちんと届を出す。という風になっているのであります。

八代将軍の時、澁江領というのは足立区です。これはどこの教育史を紐解きましても、澁江領の島根村の吉田順庵というお医者さんが出てまいります。これは私が足立区だから出したわけではありません。この方が、八代将軍吉宗の寺子屋教育に対して教育史上に目を向けさせたきっかけになったという事があるからです。

有徳院殿御実紀（徳川実記）の記録に、享保六年吉宗が鷹狩の時に噂を聞いて、（鷹狩と言うのは、軍事訓練であると同時に、ゴルフと同じような娯楽でもあり、民情視察でもある訳ですから、噂を聞くとすぐに見に行く訳です。）島根村の医者吉田順庵という者が、寺子屋を開いて子供に手習いを教えているというので、珍しいと見に行きます。すると子供達は将軍が来るというのでみんな逃げてしまった。その机の上に手本が置いてある。それを見ると『御鷹場法度証文』が置いてある。江戸近郊は足立区でなくても全部御鷹場です。鷹狩の場所になっていましたから、そこで野鳥を取ってはいけない、何々してはいけないとが書かれている。それは高札（こうさつ）に書いて出したり、名主に通達を出して村民に言い聞かしたりしているのですけれども、中々それが守れない。

その『御鷹場法度証文』という法律を、年端もいかない寺子屋の生徒に手本にして教えている。それで初めて吉宗は「教育と言うのは大事だ。今までなぜ百姓は守らないのかと思ったが、こういう教育をきちんとして無いからだ。」と気づき、寺子屋教育の推進に走ります。これは大変なことです。そこですぐに帰って、関東郡代、これは十数万石の天領を取り仕切った伊奈家ですが、この郡代をすぐに呼びつけまして、お前がこういう事を指導したのかと聞くと、半左衛門忠達は「いや私は教えておりません」と答える。それでは自発的に順庵は教えているのかとビックリしまして、白銀十枚と六諭衍義大意（りくゆえんぎたいい）という本を上製本にして、それを下賜したという事です。

この本は教育の基本を書いています、原文は漢文で色々ありますが、簡単にいえばこれは後に、私達が教わりました教育勅語の基になっています。中国の皇帝、明の開祖が人民にいわゆる教育勅語を出したのです。

- ・父母に孝順（こうじゅん）なれ。
- ・長上（めうえ）を尊べ。
- ・郷里に和睦せよ。 （喧嘩をするのではない、みんな仲良く暮らせ）
- ・子孫を教訓せよ。 （子孫をよく教えさとせ。）
- ・生理を安んぜよ。 （せいりというのは職業の事です。職業の事を昔は生理といいました。）
- ・非為をなす無かれ。 （非行に走るなと言う事であります。）

これは享保六年吉宗が荻生徂徠（おぎゅうそらい）に命じて訓読を付けさせ、室鳩巢（むろきゅうそう）に和訳させて作った教科書であります。出来たての本、それを渡しました。翌年享保七年には、大岡越前守に、この本の並製本を

沢山作らせて、江戸市中の（江戸では寺子屋とは言いませんでした、寺子屋というのは関西の言葉です。）指南所の師匠をお白州へ呼んで、一冊ずつ渡して、これで教えなさいと、教育方針を述べたというわけです。まるで文部省です。

しかし実態はなかなか大変でした。

『江府風俗志』の中に、

子供手習い寺上り（入学の事）は、赤飯煮（煮って煮物の事です。）それからお酒の目録持って、或は百疋（ひゃっぴき）（百疋と言うのは一疋十文ですから百疋になると千文、1貫文です。四千文になると一両になりますから大金です）身分相応金銀一、二両（それを持っていく訳です）子供は麻上下、親は羽折袴或にて、一番弟子より次第して羽折袴、羽折ばかりにて、是も身分相応に衣服改めの座につき、件の赤飯各各面面菓子本盆にて出し（親が出してくれるのです）盃廻し、（さかずきをまわします）尤も、支障始め、寺入りの上り子（入学生、新入生のこと）、盃廻し、（なんですかこれ宴会ですね、やくざが盃を廻すあれと同じ事やっている、師匠からまず一番弟子、盃が子供に、これは本当のお酒だと酔っ払ってしまいますから、これはおそらくお酒ではなく、私が考えるには白酒ではないかと思えます。三月三日上巳（じょうし）の節句、お雛様の時に飲む、それではないかと思えます。）

（盃回しが終わると）小謡三番、納めには高砂、（たかさごや～です。寺子屋入るのに高砂やです）高砂にて済む、（高砂を歌ってお開きになる。まるで結婚式です）女子も此の日は衣服改め手間休み知人になる事なり、（女の子に声をかけたりしてはいけないのです。男の子は子供の時はいいけども、寺子屋にあがるような年齢になると、挨拶をしてからならば声をかけても良い。）それは知人になる事なり、（知り合いになる事だ、恐いですねそんな事をやっていた。）

今より見れば甚だ正しき事也、（これは寛政ごろ、寛政年間に本が出ていますから、それから見ると昔の事は正しくやっていたなということ、だから身分の低い子供はお金がなくて中々行かなかった。武士とかが多く、職人はとてもそういうことが出来なかった。ということが書いてあります。それが段々吉宗の運動が功を奏します。）

然るに（しかるに）延享末宝暦頃（えんきょうまつほうれきころ）より手習師匠甚だ下劣になり、（下劣と言うのは、今で考えると、卑劣とか下劣とかは、いやらしくしますけれども、その時分は格式ぶらないことを、下劣というのです。別に悪い意味で言っているわけではない、あまり凝らないということのをいっているのです。）何様なる者にてても謝礼甚だ軽く、蒸物、酒肴等もいらす、（一両も二両も持っていく事は無い、蒸し物は魚、生魚は江戸では有りません、全部蒸してあります。蒲鉾（かまぼこ）とかです。冷蔵庫がありませんから、魚は傷みやすいので加工して売っていた。それを蒸し物といいます。酒肴はいらぬ、弟子入りのその体裁もです。

儀式ばらないで気軽に入れるようになった。入学しやすくなり、大変学問が進んで、身分の低い女の子でも読み書きそろばんが出来るようになった。昔は算用は武士には卑しいと見ていたけど、この頃はそれが出来ないと成り立たない様になった、ということがここに書いてある。非常に面白いです。)

婦人十呂盤(そろばん)も町人はよき様なれども、(町人はいいけども、武家社会などで、そろばん高いと嫌がられるとか見苦しいということを行っています。利発なように見えるけれども、あまり良い事ではないと書いていますけど、非常に教育が発展した事がそこでわかります。)

入学の時期は古川柳に 初午(はつうま)の日から踏まれぬ影が出来、(とあります。三尺下がって師の影を踏まずということですから、初午の日が入学の日だという訳です。) あしたから手習いダァとたたいている、(太鼓をたたいている。わたしたち子供の頃は、大店(おおだな)のきちんとした商人や地主、こちらでもそうだと思いますが、初午の日は太鼓たたくと赤飯くれたり、お小遣いくれたりしたものであります。)

入学する時に束脩(そくしゅう)があります。(入学金)白扇一對それから鯉節をつける。一朱から二百文、一朱というのは250文です。先輩の児童に菓子包みをみんな渡します。前はお盆に入れて廻すとありましたけれど、今度は菓子包みにして、岡埜榮泉(おかのえいせん)というお菓子屋さんが上野にあるのですが、この岡埜榮泉から寺子屋に、100いくつのお饅頭を、1つ1つ包んで届けている文書があります。見るとこれは入学の時だなとわかります、やはりきちんとやっていたんだなというのがわかります。これは足立区に資料が残っています。

いたずらを師匠午からつなぎ止め、(うまにかけた訳です、いたずらっ子、小学校あがるころが一番悪ガキですから。これをつなぎ止める。先生恐いですからね) だだっ子に柄樽(えだる)をつける初の午、最近までそうです。盆暮れに父兄から来るお中元とお歳暮で山になっていて、今はやかましくて教員も自粛しますし、教育委員会もうるさいですから、そんなことないですけども、江戸時代もですね、うちの子は迷惑かけると思うと親が先生に、酒1本持っていかなくては駄目だというわけで、昔は1升ビンではありませんから、角樽(つのだる)です。あれを持って行って、「先生、うちの子は手に負えませんので何分にもよろしく」なんて頭下げたのでしょ。

初午に今戸の硯よく売れる、今戸と言うのは浅草の近くに花川戸町という履物の町があります。その北の方へ行くと昔は今戸という焼き物の町であります、今でも『今戸焼』を焼いているお宅が1軒あり、招き猫や干支の人形とかを作っていますが、昔は硯を作っていました。わたしたちが小学校の時、下町などは、貧乏長屋住まいの者が沢山おりましたので、こうした家庭では、石の硯は買ってあげられないで瓦の今戸焼の硯を与えました。

わたくしは硯のコレクターで、硯をいっぱい持っていますが、これは瓦硯(がけん)と言います。中国製の瓦硯でいいものだと何十万もするのがありますが、今戸のはそういうものではありません。屋根瓦とおなじ様な瓦の軽い硯で

す。ですから2年くらい墨を磨っていると真ん中がへこんで、そこに墨が溜まってしょうがないという、そういう硯です。今戸の硯を、寺子屋は使っていたという風に思っています。

そして師匠には謝儀を払いました。謝礼金のことです。これは毎月ではなくて五節句に渡します。1月7日七草、3月3日上巳（じょうし）、5月5日端午、7月7日七夕、9月9日重陽（ちょうよう）、この五節句にだけお礼をします。あと毎月払うのは25日に天神講費を払う。菅原道真の命日の25日にちなんで大体、25文か倍の50文、なかに48文とあるのは50文のことです。当時、一文銭の中央に開いた四角い穴に藁しべなどで作った銭ざしに通し、『差し金』『さし銭』といいまして、縄でたばねてあります。一束、百文として使えますけれども、これは、かぞえると96文しかありません。4文は縄代で取っています。だからその半分は48文しかありません。48文は50文と同じことですね、ですから25文の倍と言うことになります。百ざし のことは96文しかありませんからクロク銭といいますが、なるべくほどかかないで使わなければいけません。

拝むにも二十五日は慾（よく）がなし、この25文師匠が只取ってしまうのではなくて、色々調べて見ると、師匠の家は狭いですから、お寺を借りたりして、そこでみんなおむすびを食べて、一晩合宿する。合宿してその時に師匠がいろいろ面白い話をして聞かせるのです。それがみんな楽しみで、だから25文持って集まってくる。そういうわけですね。天神様を拝むのです。師匠も欲が無い訳で、ぜんぶ還元してしまう。結構困らないように、毎月入るようになっていきます。

席書（せきしょ）と言うのがあります。年2回、これが謝儀と同じ一朱から二百文。これは昇級試験であります。今いろいろな所で書道展やっていますけれども、先生と同じ字を書いて、まるで複製のように書かなくてはいけないのではゼロックスで取った方が早い、本来師匠の字そのまま書く必要は無いのです。手本を真似して書くのでは、席書ではありません。席書は見ないで書きます。師匠は字の形と書き順番を教えるだけです。自分の字を書かなくてはいけない。見なくても自分の字が書ける。下手でもなんでもいい。見ないで字が書ければいい。それが席書です。

だから1年2年の区別は無いけれども、一冊一冊昇級していくということになる。その時にお金を取られる。それから悪ガキが集まるのですから、琉球畳の丈夫なものですけれども畳が傷む。この維持管理として二百五十文受け取る。冷房はありませんけど暖房はあります。火鉢に炭を入れますから、この炭銭を取る。

その他、寺子屋の師匠は必ずお歳暮を貰う事になっていました。それが条件のようでした。歳暮には全部鏡餅を貰う。百人もいる生徒から鏡餅ばかり貰って、どうするのでしょうか。今ならパックされて、カビが生えない鏡餅がありますけれども、たちまちカビが生えてきてしまうので、子供達にみんな食べさせます。それが現在も1月11日にしている鏡開きの由来であります。

手習子（てならいし）畳の墨の境論、畳など墨だらけです。「こ

らお前の墨が落っこってるぞ、お前がやった墨だぞ。」なんて境論やっているわけです。「これはお前の責任だ。」などと、すぐ責任を人になすりつけたがるのが人間であります。師匠様わが居るところはへりを取り、生徒の所はへりのない琉球畳だけれども、自分のところは備長のいい縁付きの畳に座っている訳であります。

つぎに寺子屋の教育内容ですが、

いろはヲ了り（おわり）仮名字ヨリ草書を授ク、とあります。草書が全盛時代であります。草書の手本になったのがこれです。そんえんしんのうじひつしょうそくおうらい（尊円親王自筆消息往来）これがお家流というものの、一番最初です。典型的な字の形、古文書は、この中でもおやりの方がいるかもしれませんがけれども、村方文書（むらかたもんじょ）と町方文書（まちかたもんじょ）と言うのがあります。

町方文書と言うのは江戸市中の文書ですけれども、村方文書というものは崩れているのが多いです。

<参考資料古文書コピー参照>

たとえば非常に貴重な、寺社奉行の文書があるのですが、元禄十三年の十月だけ、わたくしが担当して全部訳しましたけれども、まったくお家流の通りに書いてあります。幕府の役人は非常に上手にお家流を習っております。それが手本の文書になる訳です。

いろはを習うと草書に入るということになります。これはちょうど2年生ぐらいですか、仮名終わって、草書を習う。

きょうはめでたくぞんじそうろういじょう、これひとかごすこしながらしんじょういたしそうろう、今日は目出度く存じ候、この字を候（そうろう）と言うんです。江戸の人は、かなり文字を書けるような人でも、楷書は書けないです。今は草書は読めないけど、楷書は読めるという人ばかりですけれども、昔は逆です。今のように楷書で書いたら子供は読めません。これでそうろうです。

これひとかごすこしながら、しんじょういたしそうろう、どよう御見舞い（これはオンと言う字です）、ありがたくおんれいもうしあげそうろう

、江戸時代は手紙を書くのに、例えばここに『い』と言う字が出て、その次にまた、同じ行の中に『い』の字が出てきたら、違う字を書くというのがしきたりです。ですから候が来て又そうろうが来た時には、候という字を変えていきます。それを教えています。

文字の変化を持たせるということでもあります。丁度2年生ぐらいの生徒の手本であります。

初午に七千両のてをもらい、一字覚えると千金の値があるという事が言われました。手本の最初一枚は、いろはにほへとという7字書いてくれる。ですから、七千両の手本を貰ったというわけです。

師匠様いろはのうちはこわくなし、先生は最初から恐くはない、いろははこう書くんだよと非常に優しく教えてくれます。小学校一年生の先生

が優しいのと同じであります。

金釘を師匠真っ赤に焼き直し、金釘流です。それを師匠が直しているわけです。『焼き直し』

師匠さまひとつねづつにねめ回し、書き順をよく教えます。

師匠さまこわがるやつは手が上がり、先生を恐がるのは、上手になります。上手になってきたからといって先生を馬鹿にするような生徒は少しも上手にはならないです。

こういうところでお話しているのは少しも疲れませんが、中学校へ行って40分も授業すると、くたくたになってしまいます。先生を恐らないから、みんな勉強が進まないです。

教える師匠子供におぶさり、書道教室など師匠が後ろから手に取って後ろからこう、「こうやって書くのですよ」とおぶさって教えています。そのようなことです。

京までは手を引いて行く手習子、いろはにほへの終わりに、京と言う字を必ず付けたのです。悉曇輪略図抄（しうんりんりやくずしょう）という手本があります。それが大体基本になって、一番最後には京を付ける。京に始まって京に終わるとというのが、昔の考え方の一つであります。

草書の手本の始め

一字づつ登る机のあさか山。これは万葉集にあります。

あさか山かげさへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに、というのがそれあります。それを草書の手本にした。これは足立区にはありませんでした。あったかもしれないけれど、わたくしは発見しておりません。

清書の朱点童子が鬼の首、赤点と言えば今では駄目ですけども、わたしたち子供の時分は赤マルが多ければ多いほど良いわけで、赤点はいっぱい貰って、得意の子を鬼退治の酒呑童子にひっかけたシャレです。

町場の教科書と村方の教科書は違います。「いろはと都路」という、「江戸方角」というのがありますけれども、これは、かなり高学年であります。牛天神（北野神社）、伝通院、『礫川（れきせん）』と書いて『こいしかわ』と読みます。千代田文京区役所、あの前に礫川（れきせん）公園がありますけども、あれは昔は『こいしかわ』と読みました。「れき」というのは、小石の事、瓦礫の『礫』であります。この教科書は、江戸の名所を教えています。どっちの方角に水道橋があり、その側には、どういうお屋敷があつてどんな人が住んでいるか、その様な話とか名所旧跡を師匠が教えていく、これは地理でもありました。

それよりも易しい手本が、先ほどの近道子宝という物です。どういう意味だか良く分からない、何が近道だか何が子宝なのか分かりませんが、教えているのは、ほとんど手紙の書き方が多いのであります。

それからこれが「女大学」、

一つ女子は成長して他人の家に行き、舅姑につかえるものならば、男子よりも親のおしうることをゆるがせにせず、という教科書。これは長い

ので、全文やると中々良い授業になります。私はこういう教科書を何十冊も区内から集めました。

一番多く残っていたのが、舎人町の川村家でこれは川村さんから貰った「百姓往来」ですが、質入手形です。

あいわたしもうすでんちしちぶつてがたのこと、と書いてある。ひとつ上田（じょうでん）何々、中田（ちゅうでん）何々、下田（げでん）何々、屋敷地何々、林何々と、広さですね、土地の事を書いてある。質というのは今は自動車でもなんでも、物を質に入れられますけれども、江戸時代の農村では田地田畑しか質に入れる事が出来ませんでした。江戸は衣類が入りますけれども、農村地帯では田地田畑で、それを質に入れるには、名主さんの押印がないと出来ない、添書が無いと出来ませんでしたので、このような証文を書いたのですね、これを質として出すから、もしお金を返せなかったら、これを貴方が自由にしてよろしいですよという証文、それをなんと寺子屋で教えているのです。すごいですね、いかに借金すると恐いかと教えている。今の小学校、中学校、少なくとも高校で、サラ金から借りたら、えらい事になるぞと、学校で教えた方がいいです。

高校生位になるとアルバイトをやりますでしょ、お金が入らないとすぐお金を借りる。いま携帯の電話料払うのに大変です。中には何十万と払っている子供もいます。そんな子供の親に限って知らん顔するから、自分で調達する。借金地獄で、友達にいじめられて自殺する子供いるけれども、中にはそういう事でおかしくなってしまう子供いる訳です。ですから昔は大したもの。子供の時から、いかに借金をすると恐いか、それを教えながらこういう借金証文もきちんと教えて、人にだまされないように、子供から教えていたということでありま

あとは難しい中国の教科書なども教えておりました。これは町場であります。私どもの千住宿は宿場です。宿（しゆく）には寺子屋が沢山ありまして、その中には医学校がありました。外科正宗というむつかしい医学書を教える寺子屋があって、今は内田病院になっていますけれども、大変なものであります。

唐よふハ一字はなすと読メぬ也。唐様（からよう）というのは先ほど書いた楷書で書いてあるのが唐様です。続けて書いてあれば、見当で読めるけれども、一字だけだと読めない、よく英語でも前後見るとなんとなく分かるけれども、単語だけ一つ出されると意味が分からないのと同じであります。

懸かり人からやふを書きしかられる。親のすねっかじりなのに、難しい字を書いて「おとつあんこれ読めるかなあ」と言って叱られるということ

からやふにふで屋八いじりころされる。こういう楷書を書くようになると、かなりの学問いわゆる漢書を手本にします。漢文は草書ではありませんから、全文、楷書で習いますから、筆にもうるさい。『筆屋』今で言えば文房具屋ですか、筆がいっぱい並んでいる。その筆をいじって確かめたので

す。

つまらぬ事をいいますけれども、みなさまお習字をされる方は、ご存知だと思いますが、筆は先がとんがっている筆は駄目です。先がふさふさになっている筆でないと、良い筆ではありません。昔はこの筆を固めるのに、何を使ったと思いますか。今はふのり（漢字では布海苔、布糊と書きます）を使って固めていますが、昔は牛のよだれです。牛のよだれでこう固めるのです。ですから固まっているようでも、筆をおろすとぱっと開いてしまいます。ですから毛が抜けてくるような筆ではないかどうか調べる。だから、いじりころされちゃう、というのですね。

授業時間は午前9時から始まりお昼がありまして、2時ごろが下校時間でありまして。おやつというのはちょうど2時ごろであります。いまは3時になっていますけれども、2時から3時というのが、八つということです。昔、一時（いつとき）というのは、2時間ずつです。

朝十返、昼三十返、晩十返、手習い一つに十五日、五日めに清書、三度目に暗唱、見ないで書く、これが基本だということです。こんなに教えた寺子屋は少ないと思います。

小便にいとまを願ふ手習子、飽きてくると、おしっこなんて立つのはどこでも同じですね。

屁をひった子供をさがす師匠さま、そうですね子供ですから、我慢しない。わたくしも中学生の時は食糧難で、芋ばかり食べていましたから、授業中に屁をする奴がいて、せっかく授業がうまくいっているのに、くさいわ、音がするわで、みんなが笑って授業が台無しになったことが度々ありましたけれども、それを思い出します。

どうれいを大勢でいう手習子、どうれいとは、昔は訪問しますと、『たのもう』と言いますと『どうれい』と言って出たらしいです。『たのもう』と寺子屋の玄関に来る、そうすると子供達が一斉に『どうれい』と答えるんです。師匠が言うのを、真似して言うということです。

お内儀は師匠の留守に出てしかり、夫の職場に、女性は絶対出ません。けれども、うるさい子供たちに小言とを言いたくてしょうがないのに、夫の職場ですから出られない、しかし夫の留守の時は出て行って、『あんた達少し静かにしなさい。』なんていうこと言っているわけです。

師の影を七尺去ると人形書き、これは今の学校もやっています。臨教でいきましても、ほとんど話を聞いて無いです。子供は、私の話を聞いても面白くないからと思うけども、後ろの方は漫画を書いています。静かに何か一生懸命ノートを執っていると思うけど違う。

手習子又平（またへい）ほどはどれも画（か）き、又平とは土佐派の絵師で『どもまた』『どもりの又平』は聞いた事があると思いますが、非常に絵の上手な人でありまして。たまたま、どもりがあり、馬鹿にされて『どもまた』などとも呼ばれました。これが土佐派の絵師で、近松門左衛門の浄瑠璃、『傾城反魂香』に出てくる絵画きであります。

お師匠は頭痛とみんな嬉しがり、今日は頭痛だからちょっと休む
 というと、嬉しいのです。先生が休んでくれるとほんとに嬉しい。習いたいと
 行って行くのに、先生が休むとみんな嬉しくなるのは、どういう訳ですか。
 働かしてくれと会社に勤めているのに、会社が休みになってみんな嬉しがるん
 です。おかしいですね、人間というのは本当におかしなものです。人間の本性
 でありましょうか。

寺子屋では、悪戯っ子(いたずらっこ)への処罰があります。足立区には筆
 子塚という、先生を讃えた碑が沢山建てられています。大体400字から500
 字ぐらいの、漢文で書いてあるのが多いですけども、寺子屋を卒業して、こ
 んなに立派な文章が書けるから感謝するということでしょうか、大きな碑文が
 あちこちに立っております。

それを読んで見ますと、これもお医者さんですが、多坂梅里(たさかばいえ
 ん)というお医者さんで、信州から、御殿医(ごてんい)を辞めて、千住に來
 た人ですけども、そのお医者さんが、宿場女郎など大勢居る千住宿で、子ど
 もがみんな勉強しない、それを嘆いて、寺子屋を始めた人です。非常に真剣な
 教えをした、ということが書かれています。

其の教ふるところのものは、豈に唯に書のみならんや、(書く
 事だけではない、) 凡そ子弟の職、或は灑掃(さいそう)、(こ
 れは掃除です、拭き掃除の仕方ですね、) 応待の節のごときに至るまで
 皆翁(師匠)の教へを蒙(こうむ)らざるものなし、其の人を教ふる法は至嚴
 (しげん)なり、常に鞭策(べんさく)を以って、(鞭策っていうのは
 馬を打つ鞭(むち)のことを鞭策と言います。だから鞭でひっぱたくというの
 ですね、) 鞭策(べんさく)を以って懈情(かいじょう)を懲し

、(教鞭(きょうべん)と言いますから、鞭が必要なのです。繩策
 (じょうさく)もて戒め、(繩策というのはお不動さんがもっているこの紐の
 事、綱の事、泥棒を捕まえる物ですね、繩策をもて逸慢を戒(いまし)め、こ
 れは縛りあげるのですね、) 猶ほ未だ其の非を悛(あらた)めざる者
 は、或は之を懲して、すなわち負はずに筆硯文机(ひっけんぶんき)の類を以
 てし、(文房具を机と一緒にしよわせて親もとに帰してしまう、)

その嚴なること斯くのごとし、然り而(しこう)して此れ皆慈愛の至誠
 より出づ。故に子弟も亦た能く之れを親愛畏敬し、終に其の教えに浴するを以
 て能く其の習いに熟す、ということが書いてある。

いまこれをやると、問題先生になってしまいます。暴力教師ということで教育
 委員会から呼ばれ、新聞には書かれ、PTAにはつるし上げられてしまう。し
 かし江戸時代には、こんな先生でありますけれども生徒が有り難がって、この
 先生を慕って大きな碑文を建てている、という訳であります。

師匠さま机は重きとがめなり、(机の上に立たしたようです
 ね、) わんぱくさ机の上でハツを聞き、(下校時を聞くというこ
 とです。) 習わぬ子ついに兵糧攻めにあい、(お弁当を食べさせ
 ない、弁当は信玄弁当というものですね、) 昼食を外からどなる手習子

、（家の近くは食べに行ったのですね、） 手習子帰ると鍋を覗いて見、（鍋の中になにがあるかのぞいてみる）、 信玄弁当車座で手習子、（机で食べないで、みんなで車座になって食べている。）
 信玄のあたまの所へ香の物、（風呂敷に包んで行きますから、その結わいたところへ、香の物がのっている。）
 八つに授業が終わると「はらへったー」とそこでおやつということで帰るわけでありませぬ。

手習子蜂のごとくに路地から出、（表通りは商店で日々稼ぐ商店ですけども、手習の学校は全部裏路地にあるわけです。ですから路地から蜂の子みたいに出てくるわけです。）

八ツ下がり見れば月の輪ないばかり、（みんな顔が墨だらけ、真っ黒になっている。熊ではないので、月の輪が無いということをいっているのです。）

八ツ下がり熊が金時ねだるなり、（金時豆をねだる熊みたいな子供が帰ってくる。金時と熊の相撲の話をシェアしているのです。）

八ツ下がりかしくを以上なぶるなり、先ほどもお手本を見せました時に、何々以上というのありました。以上と書くのは男の子、この間、田中真紀子さんが、議会でごたごたして、記者に何々ってしゃべって「以上。」、なんて言っていたけど、田中真紀子さんは教養が無い。『以上』というの男の子であって、女性は言うものではありません。手紙にもそうです。昔は男の子は以上、女の子はかしく、だから女の子をいじめている男の子と、こういうことなのです。八ツ下がり下校時でかしくを以上なぶるなりこういうわけです。

手習いを帰ると文字へまた通い、文字というのは三味線のことです。常磐津文字太夫のことをいいますので、文字太夫の文字を取って、文字といえば三味線のことです。だから請け宿とって、人を紹介する職業安定所のような所ですが、そこへ行くとお前は文字が出来るか聞くのです。三味線が出来れば、就職する時の使う賃金も高いということになる。

手習は蚯蚓（みみず）八ツから土ほじり、釣りに行くのです。釣りに行く子は、蚯蚓を掘ってから釣りに行く、ということでありませぬ。手習が終わると、文字へ通うといっても、今でいえばピアノに通うようなものです。昔から江戸でもやはり、学習塾へ通うということになりましたら、6歳で寺子屋に入学して6ヵ年修学します。12歳で卒業、女の子は大体4年行きます。10歳で卒業、おしんがやはり、奉公に出されていますね、明治になっても、男の子は6年生だけれど、女の子は4年生までで、終わるとお裁縫を習いに行くのです。

着物が縫えなかったら、女の子は役に立たなかったのです。2年間はお裁縫を習いに行く。このお裁縫の方を、寺子屋師匠の奥さんが教えているところが沢山あります。自分のところの教え子を、4年で卒業させて、後の2年は奥さんがお針を教えて、世に出しているというところがあります。あとは丁稚小僧に

行ったり、女中に行ったりしております。

社会そのものが、職業訓練校であったと思います。日本では、徒弟制度というのが大変よく出来ておりまして、3年間は教えないです。小学校を卒業して3年間という今の中学生です。中学生というのは、読み書きも出来るから、なにか知りたくてしょうがない、大人の真似をしたくてしょうがない、うずうずしています。だけど昔はやらせないのです。やらせないから盗むのです。親方がやっているのを見ていて、盗むのです。そういう風に仕向けるのです。

ですから大工さんでもはじめは掃除だけ、材料を買いに行かしたりします。そこで、材料を買いに行っても、ただお使いに行っておいて買ってくるのでは、駄目なのです。この材料は何に使うか、杉はどこに使ったら良いか、ヒノキはどこに使ったら良いか、栗の木はどこに使ったら良いか、そういう材料の特質を、材木屋で聞いて習ってくる。

兄貴分に、「悪いけど研がしてくれ、研ぎたくてしょうがないから、研がしてくれ。」「お前なんか研いたら、なまくらになるからやらせない。」「とにかく教えてくれ、鋸を挽かしてくれ。」と頼んで挽かしてもらおう。

「親方に見つかったら怒られるぞ。」という「頼むから。」など、そんなやりとりをして、物の良さ、物の悪さ、あの兄貴とこの兄貴では、あの兄貴の方が腕が良いなと思うと、腕の良い兄貴のそばばかり行って、腕の良さを習う。3年経って、15歳になると成人です。子供は前髪がくっ付いていますから、15歳で前髪とって野郎頭になる。

15歳から、若衆です。まだ何にも教えていないのに、親方は何か作ってみるとやらせられる。大工として一番最初にやらせられるのは踏み台です。四方台形だから角度がある。これを組み合わせる。しかも、真ん中に穴があいている。のこぎりを使って、丸く穴を開けなければいけません。段がある。これを作って、親方が乗っかってガタガタしたら、「こんな物使えるか」とやられる。自分で学習し、自分で成長しようという意欲、気力、知恵、そういう物が無い者は職人としては、失格だという事で辞めさせてしまうのです。

素質がある者が一人前になって、働いてお金を貰って生活できるのです。昔はこういう教育をしたのです。今は何でもかんでも与えて、学校はあれやれこれやれ、頭に入ったか覚えたか、試験をやり、点が悪いと覚えてないなどと、年中こんなことをやっている。誰だって嫌になります。自分が知りたい事を教えてくれるのではないのだから、学校で作ったプログラムをあれもこれも、全部やらせられる学校など面白くも何ともない。

中には親に命じられて塾へ行って、少し成績のいい子は、お前は可愛いな、出来ない子はお前は駄目だと言われて面白くない。しかし昔は誰も教えてくれない。だから自分で勉強する、自分で盗む。自分で調べて、自分で教えて貰って、知りたい気持ちを爆発させるのが15歳だったのです。

俺だって出来るぞ、と頑張ると親方が、お前なかなか良いな、道具をやらうと言って、一通りの道具をくれる。この道具を持って、兄弟子に兄貴それではお願いしますと、二人一緒に稼ぎに行く。その時から、賃金を取るようになる。

それが成人です。それが男として、大人として、働く第一歩です。昔の教育は、決して馬鹿にしてはいけないと、わたくしは思っております。どうも御清聴有難うございました。（拍手）

【司会者】

大変面白い話をお話いただきました。ただいまからお二人ほどご質問がありましたら、お受けしたいと思えます。ございましたらお手を挙げていただけませんかでしょうか。はいどうぞ

【Q1】ちょっとお聞きしたいのですけれども、藩校（はんこう）という言葉、藩校と寺子屋という言葉聞いた事があるのですけれども、なにか藩では藩だけの特別な教育をやっていたのですか、

【A1】藩校というのは、どこの藩にもあります。それは、武士を集めて教育する。

武士は寺子屋に行かせませんから、藩の教育を受けさせる。これは結局藩の公立学校です。

だから幕府がやっている昌平坂学問所は、あれは東大と同じ官立です。そこには中学高校大学と揃って昌平坂の学問所があるわけです。

これに似た学校はどこの藩にもあります。りっぱな藩校があります。そこに町人も行かせた藩もあります。通学出来た町人というのは、やはり藩の財政を握っている、いわゆる資産家とか、そういう特定な人だけであります。地主とか一般の者は行かれない、それが行かれるようになっているのは、寺子屋、手習所であります。

【司会】他にございませんか

【講演者】

藩校もいい藩校があります。わたくしは良く水戸へ行きますが、水戸は弘道館という、その弘道館にちなんで、足立区に弘道小学校というのがあります。水戸街道が通っているものですから、水戸藩の影響がありました。そして弘道小学校があるから、町の名前が弘道1丁目2丁目という全部その藩校の影響を受けて街の名前まであるところがあります。

【司会】

他に御座いませんでしょうか、無ければこれで安藤先生のお話終わりたいと思えますが、それではもう一回お礼の意味で拍手をお願いします。（拍手）